



若者へのメッセージ 23

鎌倉女子大学教授
東京大学名誉教授

竹内 整一

【第三回】「自分」とはどういう存在か？

「自・分」とは不思議な日本語です。「自（おのずから）・分（分けられたもの）」であり、「自（みずから）・分（分けられたもの）」という意味合いをもっています。こうした言葉遣いをふまえながら、自分という存在のあり方をあらためて考えてみたいと思います。

「自・分」という存在

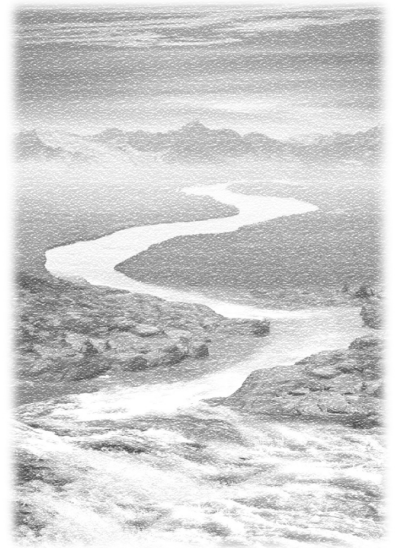
胸に手をあててみると、どくんどくと自分を生かしている心臓の働きを感じるのですが、それは、あきらかに、個々の「みずから」の意思を超えた生き物一般の「おのずから」の働きです。その働きの「分（分けられたもの）」として、この私が生きているということ

単純なことです。今私の「いのち」が生き

ているのは、ほかの無数の「いのち」を食べ、自分の「いのち」に取り入れてきたからです。

その食べた無数の「いのち」もまた、他の無数の「いのち」を食べ、自分の「いのち」として取り入れてきたのであって、こうして「いのち」の連鎖はどこまでも廻ります。

あるいは、今私の「いのち」があるのは、私に父・母がいて、その両親から生まれてきたからで、また、その両親にもそれぞれ両親がいて、



その両親にもまた両親がいて、…こうして、こども「いのち」の連鎖はどこまでも廻ります。つまり、「いのち」とは、地球上に「いのち」が発生して以来何億年ものあいだ、「いのち」が「いのち」を継いで来た、いわば「大きないのち」の流れから現れてきたものだということです。

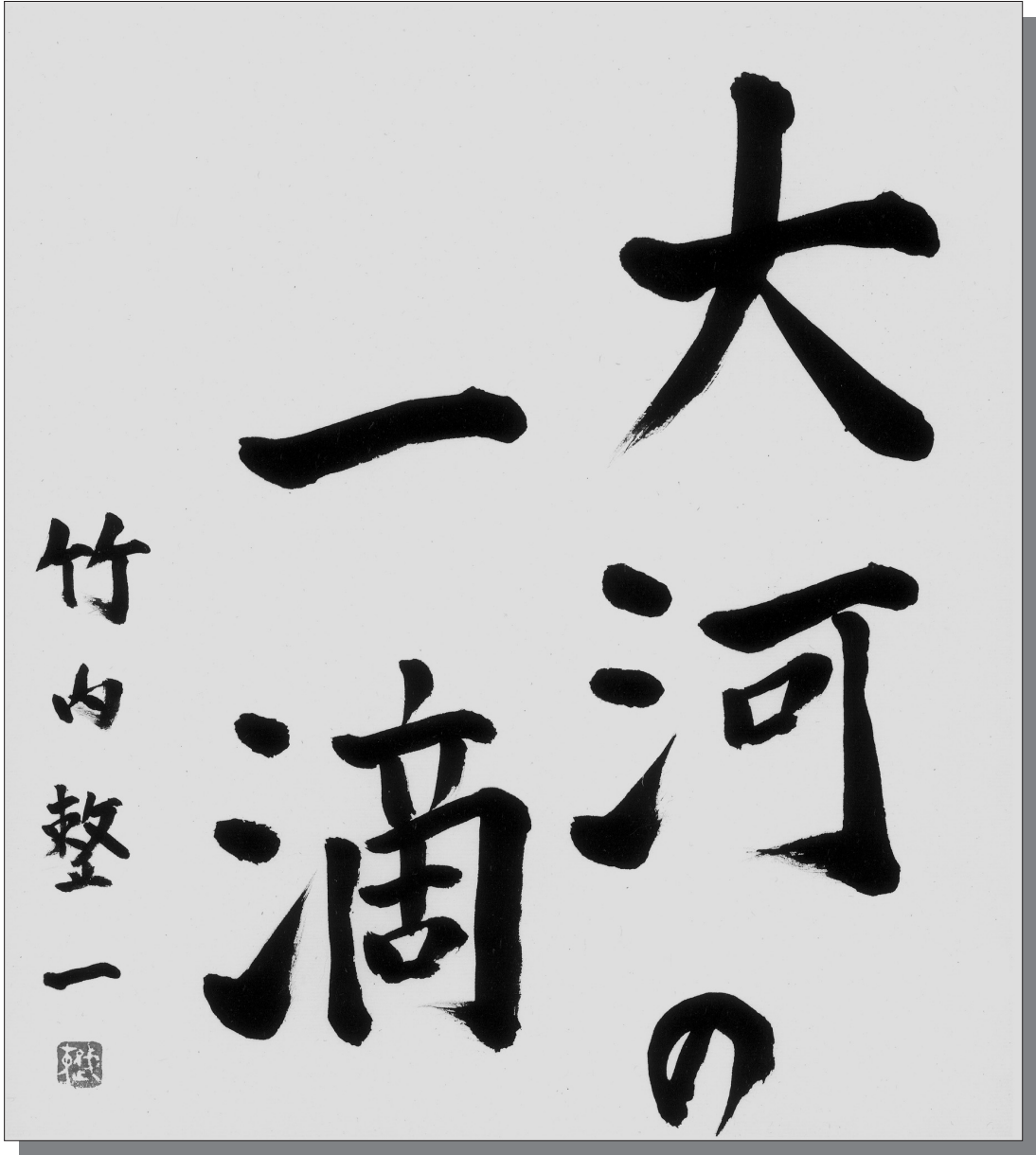
そうした「自（おのずから）・分（分けられたもの）」である自・分は、同時に、他の何ものとも交換できないこの私として、すなわち、「自（みずから）へ・分（分けられたもの）」としての自・分を生きています。生物学的にいえば、私たち一人ひとり、たとえば、DNA鑑定ができるような、個々それぞれ特定の遺伝子を持っている存在だということです。

二つの「自分」認識

色紙
プレゼント
のお知らせ

■竹内整一先生ご揮毫の色紙を1名様にプレゼントいたします。はがきに、「竹内整一先生の色紙希望」と明記のうえ、「若者へのメッセージ」に対するご意見・ご感想を添えて、編集部宛にお申込みください。締め切りは12月27日（水）です。ふるってご応募ください。なお、色紙の発送をもって発表にかえさせていただきます。

「大河の一滴」



志賀直哉は、生前最後に発表した「ナイルの水の一滴」という文章でこう述べています。

人間が出来て、何千万年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生れ、生き、死んで行った。私もその一人として生れ、今生きているのだが、例えて云えば、悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何万年溯っても私はいず、何万年経っても再び生れては来ないのだ。しかも尚その私は、依然として大河の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。

ここには、二つの「私」認識があります。一つは、この私は、何万年溯っても、また経ってもどこにもいないという、唯一無二、一回かぎりの存在だという絶対認識です。もう一つは、そうでありながら、「しかも尚その私は、依然として大河の一滴に過ぎない」という相対（総体）認識です。直哉は、その二つの認識を認めたくて、「それで差支えないのだ」と肯定的に言い切っています。

私たちは、私たち自身の言葉で、どう「それで差支えないのだ」と言えるのか、問われているように思います。